
ルガマの軌跡

セイクー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ルガマの軌跡

【Nコード】
N65930

【作者名】
セイクー

【あらすじ】

テンプレ宜しく異世界にとんでしまった哀れな青年
若干ネガティブで、女性にも多少のコンプレックスと偏った拘りを持つてもいる

そんな少年は大した成長をするわけでもなしに非日常に紛れていく物語である

とりあえず主人公の最初の時点で付属される能力はちょっとしたガ
ンダ ルブみたいな、結局ハーレムみたいなことになりそうですが、
まあ気に入ったキャラには基本リア充にします

牢屋にて（前書き）

ヘタレ success story、in 異世界
スタート

牢屋にて

「起きなさい」

自分の体が誰かに揺らされている、瞼を開ける、そこから現れた光景に思わず一瞬呼吸を無意識に行えなくなった。

切れ長のネコ目が視界を塞ぐ、それらが少し離れると、脳に視覚からの情報がゆっくりと入ってきてやっと自分のおかれている状況が頭に入ってくる。

ここは、ここは恐らく自警団の牢屋であること、またあれから俺が意識を失ってしまったとゆうこと。

そして、唯一わからないことはこの少女が誰であることだ

（なんでこいつは俺の睡眠を蔑ろにし、あまつさえこんなに偉そうなんだ）

男は、幾らこいつの顔が比較的美人だとはいえあまりいい気分ではない。と思うと少女に訝しい眼をむける

「何よ、なにか文句でもあると言うの？」

目の前の少女の特徴を大雑把に説明すると、金髪の長髪で眼がつり上がり気味だ、少し高圧的に傲慢そうにこちらを負けじと睨んでくる

「人様の眠りを妨害する権利をお前は有してはいない」

男は睨んだままでいい放つ

「お前じゃないわ、シンシアよ」

「そのシンシア様とやらは、どうして俺の睡眠を邪魔だてできるというので？」

精一杯嫌みに聞こえる様にいつてみる

「あら、以外に言葉遣いというものをわかっているじゃない、すごく好感を持てるわよ、ならば答えてあげるわ、この牢屋には私とあなたしかいない、なのにあなたが寝ていたら私の話し相手はいないじゃない」

わかるかしら？とシンシアは言う

「……」

あきれて言葉がでないとはこのことかと、のちに酷く疲れた顔で哀愁を漂わせて語ることに成ることは今の男には予想も出来ない事である、現に今の顔も大分疲れている

「まあこうやって、今は話し相手になっていてくれるのだから、不問としてあげるわ」

さも有りがたいでしょう？と言いたげな顔をしている、なんだこの牢屋の中の御嬢様は

疲れすぎてめんどくさくなった男はどうにでもなれという精神異常により

「光栄至極」

壊れていくのである

「素直ね、良いことだわ、とこれであなたの名前を聞いていなかったわね」

「わたくしめの名前など聞く価値もございません、シンシア様のお耳が汚れてしまいます」

「あなたは、素直に名乗ればいいのよ、それに不便だわ」

牢屋にて（後書き）

曄柳朝暁　かりゅう　ともあき

17歳身長は178cmと中途半端

スペックとしては、格闘技経験は少なからずもあるが、あくまで趣味の域を越えず、怠慢なら素人相手には苦勞もしない程度

けしてイケメンではないがただいま絶賛モテ期爆進中だ
主に理系

- - - - -

ある街の市長邸、地方の奮興の一貫として王家（王都）からの使者及び主要都市などの市区長等が集まって知恵を出し会う、となっている

今回はこの街が開催地となり、定例道理に会合を執り行ったあと別会場に移動し、ちよつとだけ華やかなパーティが開かれる、そんなパーティにある街の貴族の一家の一員としてシンシアは参加した

今回の会合に参加しているメンバーの中にシンシアの個人的に会話できるような若いこは来ていない、特に毎回のことはあるが、シンシアも毎回きているわけではない、早い話しが暇を持て余しているのである

ソフトドリンクを、侍女から貰い、思い思いに傾けていると少しさきから、侍女が早足でかけてくる

「シンシア様、お楽しみですか？」

「全然だわ、少しは催しものにもう少し気をかけて欲しいわ」

「そんなに大きな声で言っではいけませんよ、まだ終わりまだ大分あります、中にはシンシア様の趣向にあつた催しがあるかもしれない、最後までお耐えください」

それでは失礼します、お侍女は言ってまたもとの場所に消えていく

「またね」

そうして牢屋には静肅が戻ったのだった

そして朝暁は一人思う　なぜこうなつたと

嵐が過ぎるように（後書き）

シンシア・エルド・カリシルネ・ユーフォン

年齢は朝暁と同じ15

身長160 スタイルも悪くなくスレンダーで胸も順調に成長している

金髪のストレートを肩まで下ろしている

主にツンデレ担当だが、ヒロイン候補としては薄い
地方を統治している貴族の長女として生まれる

自宅がある小高いおか（前書き）

警備の者

自警団みたいな職代々やる家族は継承される
親から子に

自宅ゝある小高いおか

俺こと嘩柳朝暁がなぜこのようなトンデモな状況にいるのかというのか、それを思い返してみることにする

中学の卒業式のあと、俺の唯一の友達である奴とそれの取り巻き数人で打ち上げまでの時間を潰すのに付き合うことになった。

無論、打ち上げには参加するつもりはなかった、それに関して友達は来るように促してきたが、おそらく自分は皆に呼びでないことなどを言つと、呆れたような顔をして一応了承した、なぜあきれるつと言つと憐れみの表情をするので、一発殴つておいた。

話しが逸れたが、そのあと友達等と別れて自宅へと帰宅して中学校のお記憶を反芻していた。ああ、録なこととを…してないなと思っていたとき

部屋に不穏な気配を感じた気がした、俺にそんな能力はないのになあ、確かに感じた

刮目して自分の回りを見渡す

「はっ？」

窓の閉めてある部屋に空気の動きをみた、どこから？そよ風程度だった、戸惑っていると、それは俺認知から外れているあいだに空気の奔流は部屋を荒らしていき強さは更に増し続けていく。危機を感じ

じて対処を考える間もなく俺の視界が瞼が無意識に降りることにより閉ざされていく

「のわあああつつつ！！！！」

このときの自分に会えるなら、なんの反応も対処も出来ない不甲斐なさに感謝の意こめて殺してやりたいと、今は思っている
気がついたら

「どこだよここ」

キョロキョロと自分の周りを見渡す、見たことのない西洋風の白壁の街を見下ろしている、自分のいる場所が少なからず高所にあることがわかる、今はおそらく早朝だろう日の出を確認できた、空に赤みがかっている様子はない。次の瞬間、目眩をかんじる

「く…はっ あ」

次には吐き気を感じ、動悸の速度がより速くなる感覚を覚える。俺はこの感覚に覚えがある

高山病だ、しかしなぜ？

混乱したまま、意識を手放した

*

「…い…おい、おい起きろ！」

少年のようなこえがする、それに促され眼を醒ます

「がつ、くあ…」

まだ残る気持ち悪さに苦しみながら、上体を起こす。

「おい大丈夫か？」

少年の心配するような声が聞こえる

「ああ、概ね大丈夫だ」

眼を開けると青紙の少年がたっていた、さっきの場所からは動いていないみたいだ

「俺はレン、警備の者で今は親父が責任者で、今ここにむかっている、とりあえずなんでここにいるか、どうやってここにいるか教えてくれ」

レンと言う少年は早口にせまる。どうやら疑われているばいな、こ
うゆう時はこうだ

「俺の素性を話すとしても、お前じゃ力不足だ、その責任者が来たら話すとさせて貰う」

朝暁は突き放す様にいう

「…そうか、ここは立ち入り禁止区域だ、そこから魔力の反応がし

たから駆けつけた、お前はここに魔力を不可思議に使用した疑いで不審者として認識している、更には不正に侵入しあまつさえ、こちらに敵対する態度をとったものとして拘束させて貰う」

レンはどこからか両刃の剣をとりだし朝暁にせまる、

（魔力？それに今どこからだした）

朝暁はそう思いながらも、迫る刀身の横に拳打を叩き込んでいなす

「なっ、やはり只者じゃない、な！」

いなされた反動で手首を返して下から切りかかる

「正当防衛ってことで」

半身にからだを翻して避けそのままの勢いで脇腹に左の裏拳を叩き込み、半歩踏み込んで左の肘を降り下ろし一回転して回し蹴りを刀身もろとも首もとにぶつける

自宅ゝある小高いおか（後書き）

レン・T・バポット

朝暁に剣をつきつけた少年、青髪のショートで、ホントは穏やかな明るい性格だが、警備の仕事に誇りをもっていて、その仕事にはげんでいる

ときは性格が変わる

身長は朝暁より少し小さい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6593o/>

ルガマの軌跡

2010年11月8日12時58分発行